



福岡女学院の芸術教育―田中冬心・貝島福通を中心に―

大 國 眞 希

田中冬心（順之助）は一八九三（明治二六）年一〇月二四日に朝倉郡甘木に生まれた^①美術家で、福岡女学院の歴史においては、一九四一年九月に制定された校章のデザインを手がけた図画担当の教員として名をとどめている。当時、冬心は福岡女学院（当時福岡女学校。本稿では便宜的に福岡女学院で統一する）に在職中だった。

在学生たちが和服で通学していた頃は、葡萄を描いた銀貨のような徽章を袴のひもを通して身に付けており、一九二二年にセーラー服を着用するようになると自然に見られなくなっていた。戦時下に制服を新調することが難しくなり、一九四〇年には国民服令が制定されて、標準服に統一された時世には、冬心デザインの校章は制服に代わるものとして着用されるようになったという。^②一筆で描いた葡萄を、十字架をあらわす三本の枠で囲うデザインで、学院聖句（「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。人がわたしにつながっており、わたしもその人につながっていれば、その人が豊かに実を結ぶ。わたしを離れては、あなたがたは何もできないからである」ヨハネによる福音書「一五章五節」）を具現化している。本稿では、福岡女学院のアイデンティティを担う校章をデザインした冬心について、校友会雑誌「若樹」を繙き、^③福岡女学院での教育実践の輪郭をなぞることを目的とする。冬心の在職期間は一九二五年から一九五八年で実に三〇年以上に及ぶ。創立七〇周年記念式では永年勤続者（現職員）として表彰された名簿に名を連ねており、^④奉職は病を得て永眠する直前まで続く。

田中冬心の経歴をおさえておくと、甘木に生を享けた冬心は、一九〇四年の福岡市への転居に伴い、安川尋常小学校から中市小路尋常小学校に転入し、福岡高等小学校を経て福岡商業学校に学んだ。試験の最中でも屋根に登り、写生などを熱心にするほど、画に専念していた。描いた絵はすでにこの頃から認められていて、文藝雑誌に絵が掲載され、受賞歴もあるという。天麗郎と号して俳句をひねっていた。

往時を偲ばせるような田中冬心の詩が「若樹」に^⑤掲載されている。

鮎つり

柿の若葉は 花より美しい
画のうを抱えて東西に逍遙す

山を背に 柿の村
川を挟んで両三家

梅の下蔭は青く香い
どくだみの花が白い

頼の音が竹林にこもつて居る
川に下れば黝い踏石は昔のまゝに
砂底に鍋はしづもり

水漬く飯籠にどんぼうの居て
嗟嘆少年春

あの石垣のおの穴に今も鯰魚が住んで居よう
雨もよひのどんより重い川面に

川苔の香をさがす一と刻
汗ばむ まなかひに
払へどもブヨの去らず

今年の解禁（六月一日）も柳葉と云はゞ云へ

故里の川。

商人となって家業をつぐことを期待されて上京したときには、「機械室の小僧」や「薬屋の小僧」をしながら夜学に通い、一九一三年に太平洋画会洋画研究所に入った。^⑧そこで中村不折らに学ぶものの、学資に窮して一旦帰郷する期間も挟みながら、津田青楓の食客となり、太平洋画会研究所を卒業した。一九一九年には太平洋画会展と国民美術協会展、一九二〇年から中央美術展、一九二一年に二科展、一九二三年に平和博覧会美術展とサロン・ドートンヌにそれぞれ出品した。一九二三年に発生した関東大震災を契機に福岡市に転居して、一九二四年に福岡洋画研究所を開設した。そして、一九二六（大正一五）年九月一日に晴れて私立福岡女学院の教師となった。終戦後に県展や私学展などが毎年開催されるようになる、生徒達は知事賞、教育委員会賞、私学協会賞などを受賞し、年によつては私学展に全員入賞したこともあるという。^⑩『福岡女学院七十五年史』には「学院独特の個性教育の開拓のために」活躍し、その功績は大きいと記録されている。

なにより、田中冬心を図画の教員として迎えて、図画科を中心に学科を越えた総合的なカリキュラムを導入したことで、創造性を育む環境を整えられた点も見逃ごせない。その成果のひとつが一九三三（昭和八）年の玉屋における市内私立学校合同展覧会に出品された「私の部屋」だ。『福岡女学院七十五年史』には「私（福岡女学校生徒）に必要な机、本棚、カーテン、掛軸その他の調度品、通学用の手さげカバンから制服の裏返し仕立て直しに至るまで、全部生徒の共同製作の題材としてとりあげられ、各科がおのおのその特技をもって参加した」との説明があり、「当時としては型破りの新しい着想」で会場でも異彩を放ったと記録されている。【写真一】

この総合的なカリキュラムが更に一九三五（昭和一〇）年五月一八日から二一日までの四日間にわたつて開催された五〇周年の記念行事にも展開されていく。記念行事開催にあたっては全生徒に役割が与えられ、四月から午後は特別授業が実施された。そうして迎えた当日は、記念式や記念礼拝のほか、「裁縫と手芸の室」、「家事の部屋」（壁に飾られた風呂敷や蠟画、エッチングのクッションや鹿子の鏡掛、琴の油单、屏風、カーテンに添えられたミミツクなどすべて手作りのものが配置されている）、「お習字の室」



【写真一】

「わたしの部屋」（福岡女学院資料室所蔵）生徒たちのイニシャルが刺繍されたパッチワーク

(在校生の習字を中心に、卒業生のも合わせて、卒業生が活けた花が下に添えられて展示された)、「思ひ出の部屋」(沿革略史、写真、絵巻物に分けて本学の歴史が飾られた)、特別展覧会場(卒業生の分布や食堂のメニューなどを紹介)、「文芸会の部屋」(文芸会を開くまでの一年間を原稿や操り人形などと共に展示)などの展覧会も開かれた。文芸会のプログラムは映画「青年会日記」「国旗掲揚式」「光の子供の如く歩め(夏の修養会)」、立体図画「お菓子の家」、仮面劇「龍」、英語劇「Little Pilgrim's Progress」¹⁾、同窓会主催の音楽会も上演された。

記念行事の様子は福岡女学院の校友会雑誌「若樹」を手掛かりに再現することができる。昭和一〇年刊行の「若樹」は、さながら記念式典特集号の様相を呈していて、目次は「記念日まで」「記念式」「展覧会巡り」「文芸会」「音楽会」「記念礼拝」「追悼会・賛美礼拝」「懇親会」「最後の日」「同窓会欄」「文苑」「彙報」「編輯後記」であり、巻頭には「記念式」「記念礼拝」「記念追悼会」「裁縫手芸」「特別展示会」「思出の室」「習字」「家事」「文芸部」の写真も掲載されている。²⁾「文芸会の部屋」を紹介する記事には「自分達の手で創れ」それが私達のモットーでした。日頃学んでゐる国語・図画・家事・裁縫・音楽……いろいろの学科の力が知らず／＼の中に働いてゐたことを感じます」と書かれており、生徒たちも総合的なカリキュラムに自覚的に活動していたことが窺える。以下、いましばらく「若樹」に登場する田中冬心を追いながら、総合的なカリキュラムの一翼を担う美術教育活動をみてゆこう。ひとつめに、徳永院長の帰国歓迎発表会で上演されたオペレッタ「Rainbow End (虹の果)」をあげておく。五〇周年記念行事から時代は戦後にうつり、従来の級長制度が廃止され、生徒の自治活動が一層活発になり、新教育研究活動も進められていくなか、一九四九(昭二四)年五月から一年を越えるアメリカ滞在から帰国した徳永院長を歓迎して開催された発表会で、英語科を中心に、体育、音楽、図画、家庭科協力によって上演に漕ぎつけた。「若樹」には「十一月一日 院長の帰国を歓迎してオペレッタ「虹の果」が盛大に演じられた。その時のバックとバックを制作した美術同好会の人達」³⁾の説明つきで田中冬心と生徒たちの写真が掲載されていて、制作された舞台背景の一部を見ることができる。

もうひとつ。一九五二年刊行の「若樹」(復刊六号)には「九月二十八日 新館の建造資金募集の為め同窓会の賛助出演によって聖劇「十字架の挑戦」が盛大に演じられた。その時のバックとそれを制作した人達」として、冬心と共に生徒たちの写真が掲載されている。また、『福岡女学院百年史』には、一九五一年六月一〇日の「母と子の日」に、国語・音楽・体操・図画・理科などの各科が参加してそれぞれの特性に応じて共同指導した劇「こまどり」が上演されたことが紹介されており、「その後、全校的行

事には、この方法がとられるようになった」と書かれている。

「若樹」九号（一九五五年）を開くと、冬心による画「わか樹」を色付きで見えることもできる。【写真2】冬心が永眠した年は、福岡女学院の新校舎設計が始まった時期でもあった。冬心は新校舎の壁面に卒業生によって平尾（南薬院）の校舎の思い出の木彫りを残す計画を構想していたが、その計画は実現されることはなかった。

以上、「若樹」を、冬心に焦点をあててその実践活動のみてきた。ここで焦点を広げて冬心の息子で、父親同様に福岡女学院に美術の教員として在籍していた貝島（田中）福通についても少し触れておきたい。

貝島（田中）福通（一九二九年—二〇一〇年）は、一九五〇年に福岡学芸大学美術科を修了し、一九五四年から一九五六年まで福岡女学院に在職している。¹³⁾

一九五六（昭和三）年に刊行された「若樹」一〇号の編集後記には田中（貝島）福通による「表紙説明」がある。そこには、「表紙は石膏で作った壁面上に、生徒作品三点をアレンジし、それに合せて文字をレイ・アウトしたものです。（若樹の文字はステンシルであとは筆描きです）石膏面にもう少しはつきりした色面、形態を出してもよいと思えますが、ここでは完成した三点を主役とする伴奏の目的を合わせる事になります」「裏表紙はカンバス（油絵の材料）の生地を生かして、淡いデッサンのあるものです。（この部分は冬心先生の作です。委員）」ともあって、本創立七〇周年記念号は冬心と福通の合作によって包まれていると言えよう。【写真3】本号の巻頭には、福岡県知事賞を受賞した絵や福岡県展入選画が巻頭に掲載され、田中（貝島）福通の解説が付されている。

翌一九五七年の「若樹」（一一号）の「美術クラブ」の記事には「美術クラブは、色々の展覧会に出品する機会が多くて、大へん張合いのある一年間でした。最初が創立記念日、わずかに新廊下の片隅をいただいで発表しましたが、十二月、あらためて、学院の発表会として、他の展覧会場にも恥しくない会場もでき、又私学展、高美展等と美術クラブ始まって以来の展覧会の多い年だったのでないでしょうか、作品自体は冬心先生もよくおつしやつていらつしやるのですが、今一步の努



【写真2】
「若樹」掲載の冬心による「わか樹」



【写真3】
「若樹」の表紙・裏表紙

力が足りないようでしたけれども、どうか他の学校にも負けない作品もありますし、今後大いに勉強して、よりよい作品を描く事を望みます。今までのクラブの中心だった福通先生がおやめになって活動する上に相談に乗ってくれる人もなくどうしようかと思つた事もありましたが、二学期から新しく服部先生の協力のもとに又前の活気を取りもしました。視聴覚のレコードコンサート、のポスターを書いたり、本当に楽しい一年だったと思います。一つ残念だったことは、クリスマス祝会の偽装飾をたのまれクラブ員何名かが素晴らしい計画を立てて、特に二間半程の大きな用紙に、イエス誕生の時の様子を描いたモザイクを計画して、サック放課後のこり、スカートは、ノリだらけの、山下清になり切つて、おそくまでかかつて作つた作品も、突然休校になり皆様に観賞してもらえず本当に残念に思っています。」とクラブでの活動が記録されていて、冬心と福通が「美術クラブ」に中心的に関わっており、この時期に福通が離職したことを確認できる。⁽¹⁴⁾

そして、一九五八年「若樹」(二二号)の表紙は臼井圭介(臼井圭助の誤りか?)と紹介されていて、一九五九(昭和三四)年福岡女学院中学一号「わかぎ」の表紙のハリエについては臼井圭助が解説を付しており、この辺りから田中冬心から臼井圭助へとバトンが渡されたことが確認される。

最後に、この交代において象徴的な誌面を指摘しておく。藤川栄が書いた「冬心先生」が載っている「福岡女学院時報」(二九号)では、「冬心先生」の記事に並んで、臼井圭助が次のように語っている。⁽¹⁵⁾

大学卒業後、すぐに美術の教師として赴任したのが昭和三十二年。もう二十年も福岡女学院にいることになる。最初は冬心先生の影響力が大きく、私などが出る幕はなかったが、二年間お付合する機会を得、いろいろと説教され、注意をうけた期間もあった。そのときに、しみじみ言われた言葉に「教育に熱心になるのもいいが、自分の芸術も向上させなくては、真の美術教師になれないよ」と。

事実、私自身絵を描く暇がなくて、困っていた時代だったので、何とも厳しい言葉だと思っていたが、今にして思えば、あの時無理して描いていたことがよかったと考えている。

白井圭助が田中冬心から影響を受けたと語る教育と芸術の両輪は、瓦田勝を経て、現在の福岡女学院にも生きている。これについては別稿を期したい。

【註】

- (1) 藤川栄「冬心先生」(『福岡女学院時報』一九七・二〇・三一 引用者注 藤川栄は福岡女学院の元教員)には「博多の町家」とある。同じく藤川栄「冬心先生を悼む」(『福岡女学院高校新聞』五〇号)には「福岡県甘木の安川にて生れ、秋月の風格ある土地で幼時を過され、少年期に福岡市に移り住まれて小学校から商業学校へと家業を継ぐべく進学された」と書かれている。
- (2) 『福岡女学院』一〇五年史(一九九二)。
- (3) 冬心がデザインする以前、昭和八年頃に一度「福岡女学校女子青年会誌」第一号で全校生徒に校章図案の募集が呼びかけられ、その優秀作品が「若樹」創刊号(一九三三)に掲載された(平池次郎「福岡女学校青年会誌の回顧「若樹」五号 一九五一・三。藤川栄「斑入り龍舌蘭」(一九八〇)にもその七点の図が紹介されている。藤川栄は、「比類なき日本一の制服があるのですから、わざわざ校章を作製する必要も切実に感じられ」なかったために、全校生徒の公募による校章の図案は「うやむやになかったが、「昭和十五・十六年頃になって校章の必要性が提案され」、「図案作成が田中先生に委嘱された」と書かれている。田中冬心は「これはな、ユタを除いた十一弟子が、誰からともなく、しつかりつながるとるばい、福女の者はこげん(このように)みんながつながつとらないかんもんな」。と語ったという。校章のデザインについて「福岡女学院九五年史(二八八五・一九八〇)では「一筋の糸で結ばれたぶどうは一つの信仰に連なつた多くの兄弟姉妹を象徴する」と説明している。
- (4) 「若樹」は、もともと刊行されていた新聞型の「福岡女学校青年会誌」の作品号として一九三四年に誌名が募集され(その結果、詩篇二八篇(汝の子輩は汝の筵に円居して橄欖の若樹の如し)にちなんだ名が冠された、年刊の校友会雑誌。
- (5) 『福岡女学院七十五年史』(一九六二)。その他、院長の徳水ヨシ(二三年)、教諭平池次郎(二五年)、藤川栄(一九年)。表彰された現職員のなかでは田中冬心(二八年)が最長である。
- (6) 田中冬心の略歴については、藤川栄「冬心先生」(前掲)、「冬心先生を悼む」(前掲)のほか、『郷土ゆかりの物語作家にみる風土と人脈 近代洋画と福岡県』(福岡県文化会館、一九八〇年三月二日・三日)の図録及び野田正明編『福岡県西洋画近代画人名鑑 本邦美術家伝国勲章叙勲者録』(筑後画廊、一九九五)も参照した。
- (7) 「若樹」復刊六号(一九五二・三)。
- (8) 『太平洋美術界百年史』(太平洋美術会、二〇〇四)によると、一九一三年の研究所の教師は中村不折、満谷国四郎、中川八郎、岡精一、石井柏亭、藤井浩祐。一九一九年には第一六回展覧会が二月二日から二七日に竹之台陳列館で開催され、第一部絵画二六八点、彫刻八点、第二部絵画八七点が出品された。
- (9) 國生雅子・井上洋子「環水莊遺翰—加野宗三郎宛書簡集—」(四)『福岡大学人文論叢』五六巻一、二〇二四)では大正九年九月二三日付津田青楓書簡を引用し、「大正二二年九月一日の関東大震災に遭って、帰郷するまでの三年近くが、冬心の東京時代と考えることが出来よう」とする。また、二科展に水仙の絵を出品し入選したことが書かれた大正二二年九月六日付の冬心書簡も紹介している。

(10) 「若樹」の巻頭には生徒の入賞・入選作品の写真が掲載されている。その他、例えば一九五三年五月刊行「若樹」(復刊七号)の「美術クラブ」の記事には「私学展(私立学校芸術展覧会) 入賞者四名、西南学院文化祭に入選・出品者六名が記録されるなど「美術クラブ」の活動記録も読むことができる。

(11) 記念式典の詳細記事が並ぶ当該「若樹」の「祝宴」の頁には藤の造花によって飾られた大天幕に真っ白のテーブルクロスが敷かれたテーブルが並ぶ部屋の模様とともに、そこでの景色を表わす生徒たちの短文とイラストが掲載されている。そのなかに、戦時下に学生たちが刊行した文藝雑誌「こをろ」の同人の周辺にいた「グルッペ」の一人である「井上ミユキ」が書いた「制服」(「新しく着た制服／何だか急に／御姉様の様よ／なぜつて?／でも／厳粛な／清い／記念式に加はる／一人なんですもの」)を見出すことができた。ここから「グルッペ」たちもまた、この行事を支える特別授業に参加する生徒三七三名に入っていたことを確認できる。このことについては別稿を期待したい。「グルッペ」と「若樹」については拙稿「文藝雑誌「こをろ」と「若樹」」(福岡女学院大学紀要人文学部篇)三五号、二〇二五も参照されたい。

(12) 福岡女学院大学紀要人文学部篇)三五号、二〇二五も参照されたい。
 復刊五号、一九五一(昭和二六)年三月刊行、一〇二頁。表紙の題字は「わかき」とひらがな書き。ついでに言っておくと、表紙に「昭和一年福岡女学校青年会」とあり、奥付には「昭和十年十二月二十五日発行」とある「若樹」の表紙の題字は「わか樹」であり、もともと必ずしも題字は統一されているわけではない。歴史的に言えば、後に高校から中学が独立して一九五九(昭和三四)年に平仮名書きの「わかき」(福岡女学院中学一号)が刊行されるようになる。

(13) 貝島福通については武田義明『福岡現在芸術ノート』(花書院、二〇二二)に詳しい。また、『福岡市美術館開館一周年記念特別展アジア美術展第二部アジア現代美術展』(福岡市美術館、一九八〇・一一・一一―一二・三〇)や『福岡美術戦後物語』(福岡市美術館、一九八八・八)などにも略歴の記載がある。『平成一八年第六二回福岡県美術展覧会』(福岡県立美術館、二〇〇六・九)は貝島福通の「覗かれた風景」が表紙になっている。

(14) 田中冬心について昭和三年卒業の渋谷敏子氏が「冬心先生にはずっと習いましたが、既存概念にとらわれず、自分の感覚で見る様にと云う事を教えられたと思います」と語っている。(福岡女学院と私 勤労奉仕の日々と戦後教育) 福岡女学院同窓会関東支部二〇一四年三月開催「談話室ぶどう」原稿 福岡女学院大学資料室所蔵。

(15) 「福岡女学院時報」二九号(一九七七・一〇・三二)の「冬心先生」には「先生は性格極めてざっくばらんで上品振ることが大嫌いの様でした。就任当時はかすりの着物に袴といった書生風で、博多弁丸出しで美に元気に溢れた先生だった」「校内では禁酒禁煙が厳しかったのですが、冬心先生だけは特別例外で大目にみられ、自室にこもった紫煙をくゆらしておられました」など間近で見て来た冬心を活写している。また、「一見して芸術家とわかる様な」「どこでお切りになるやら分らない様な切り方をしてさぞ床屋さんは困っているだろうと思われ」など、福岡女学院新聞(「ぶどう」)第四号(一九五四・二・四)掲載の「文字による冬心先生描写」では生徒たちから見た冬心の姿を伝えている。

【付記】

「若樹」「わたしの部屋」「年史」などの資料につきましては福岡女学院大学資料室に大変お世話になりました。また福岡女学院図書室にも大変お世話になりました。記して御礼申し上げます。

【参考文献】

- 『福岡女学校五十年史』（一九三六年）
- 『福岡女学院七十五年史・通史・資料編』（一九六一年）
- 『福岡女学院写真でみる七十五年史』（一九六一年）
- 『福岡女学院九十五年史（一八八五～一九八〇）』（一九八〇年）
- 『福岡女学院百年史』（一九八七年）
- 『福岡女学院一〇五年史（一八八五～一九九〇）』（一九九二年）

